

# しのはら歴史便り

篠原地区歴史同好会／浜風会会報 No.30

浜風会/入会募集中  
毎月第1,3木曜日

## しのはら歴史便り30号

浜風会が発足して二十九年、そしてこの「しのはら歴史便り」を発刊して今回で30号を迎えた。  
平成十四年八月一日に第1号を皮切りに、毎年二回継続してきた。そこで初心に返って経過をまとめ、今後の糧にしていきたい。

### 「掘起し」その「伝承」が目的

浜風会は、平成元年発足以来、『浜風と街道』の発刊に尽力した人達が集まって、故郷の歴史を掘り起こし、子供達にわかり易く伝えようと活動してきた。

そして『篠原村誌』の復刻、「ふるさと資料室」の設置と運営、「ふるさとウォーキングマップ」作成、『篠原村誌続編』の発刊等、成果を発表してきた。

その後、日常の活動から後世に伝えるべきことを、ピックアップし形あるものに残そうと、「しのはら歴史便り」にまとめ発行してきた。(内容は下表)

### 発行部数は三百〜四百部

- ・篠原・舞阪・雄踏の小中学校
  - ・市中央、外の図書館・博物館
  - ・浜松市長、篠原自治会連合会
  - ・篠原協働センター/同配布用
  - ・篠原在の農協、寺院等へ配付
- 今後はいつその「深堀り」を今後共新しい視点で、新しい発見に取組み、そして発表していきたい。  
(山下勝彦)

今までに著してきた事柄(標題で示す) 順不同 ○数字は掲載号数を示す

<p><b>浜風会関係情報</b> ①②⑨⑳</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・会報の発行/浜風会の歴史等</li> </ul>	<p><b>行政・組織の歴史</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・浜松市合併の意味③</li> <li>・篠原地区の行政区について⑥⑦⑧</li> <li>・戸長・戸長役場について⑨</li> <li>・篠原村の歴代村長⑩</li> <li>・地域力を支える活動⑬</li> <li>・以前にもあった篠原の合併問題⑮</li> <li>・昭和時代に盛んだった青年団活動⑯</li> <li>・篠原地区婦人会の歴史㉑</li> </ul>	<p><b>神社・寺院に関すること</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・坪井稻荷神社の棟札について②</li> <li>・日本の神道と神社について⑨</li> <li>・春日神社(馬郡町)⑮</li> <li>・願いごとが叶う「馬郡観音」⑯</li> <li>・神明宮の古い棟札⑰</li> <li>・保泉寺の火祭り⑰</li> <li>・篠原はお寺が多い⑱</li> <li>・八阪神社のお天王様㉑</li> </ul>
<p><b>伝説</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・篠原「鈴木」の元祖を探る①</li> <li>・美人塚(小藤)と(静丸)①</li> <li>・篠原概略歌(明治10年6月)②</li> <li>・長里郷のこと⑭</li> <li>・米津の江戸送り地蔵⑳</li> </ul>	<p><b>史実</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・困難をともなった海の東海道②</li> <li>・馬郡村の年貢について④</li> <li>・400年前の検地帳④</li> <li>・村入用について⑤</li> <li>・農民と近世の村⑤</li> <li>・江戸時代の村と検地と年貢⑥</li> <li>・篠原村の年貢・御廻米の記録⑦⑭</li> <li>・篠原村にあった吉田領のこと⑧</li> <li>・藤田家とゆかりの文化人⑩⑪⑫</li> <li>・家作と村人の見舞(お祝い)⑩</li> <li>・雨乞いの行事⑪</li> <li>・道中日記の一事例⑫</li> <li>・旅日記より(その2)⑬</li> <li>・嘉永7年の津波のこと⑬</li> <li>・地租改正と地券⑮</li> <li>・嘉永6年癸丑暦(伊勢暦)⑯</li> <li>・城内のこと⑱</li> <li>・往来一札之事⑱</li> <li>・江戸時代の加宿と助郷、馬郡村・⑲</li> <li>・御年貢皆済手記㉑</li> <li>・水野南北物語㉑</li> </ul>	<p><b>学校に関すること</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・篠原小学校創立の頃③</li> <li>・篠原小・舞阪小創立の頃④</li> <li>・篠原小学校の扁額⑬</li> <li>・馬郡学校のこと⑰</li> </ul>
<p><b>調査創作</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・坪井村五人組帳③</li> <li>・遠州屋傳兵衛について⑰</li> <li>・大地震の歴史⑱</li> <li>・坪井村篠原村「五人組帳」冊子⑲</li> <li>・遠江井伊氏と日蓮上人⑳、㉑</li> <li>・浜名湖上の交通の変遷㉑</li> <li>・篠原地区の「山」を探る㉑</li> <li>・海中出現の仏様多数㉑</li> <li>・時代で場所を変えた戦争記念碑㉑</li> <li>・落花生万国博覧会に出品㉑</li> <li>・新田開発は安政年間㉑</li> <li>・江間家の尺時計の表示板㉑</li> <li>・「六部様」を新発見㉑</li> <li>・伊能忠敬の遠州路測量の中から㉑</li> <li>・命山㉑</li> <li>・篠原地区のつつみ・峠の歴史㉑</li> <li>・篠原地区の秋葉山の調査㉑</li> <li>・「鈴木」姓は篠原に何故多い㉑</li> <li>・土地改良の歴史㉑</li> </ul>	<p><b>産業の変遷</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・篠原の玉葱⑫</li> <li>・篠原の玉葱が変わる㉑</li> </ul>	<p><b>投稿</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・善光寺如来(山下孝)⑤</li> <li>・古瀬戸瓶子出土と観音堂⑥</li> <li>・ハワイ島小学校訪問⑦</li> <li>・女性天皇の話題⑦</li> <li>・篠原地区の歴史について⑧</li> <li>・駅伝の由来篠原地区の東海道⑨</li> <li>・志を立てて郷関を越え⑩</li> <li>・自己満足の生涯学習⑪</li> <li>・地を離れて人なし(河合九平)⑭</li> <li>・わが家を取りまく小さな歴史⑭</li> <li>・姓氏(名字)について⑮</li> <li>・東海道線の今昔⑰</li> <li>・篠原地区のこま犬さん⑱</li> <li>・思うがままに⑲</li> <li>・地域文化賞受賞㉑</li> <li>・昭和20年代の東海道の景観を㉑</li> <li>・篠原国民学校の分散教育㉑</li> <li>・むかし話㉑</li> <li>・白砂青松の前浜は今㉑</li> <li>・前浜で思うこと㉑</li> <li>・私のヨーロッパ紀行㉑</li> <li>・私の人生、過去・未来㉑</li> <li>・舞阪駅周辺雑感㉑</li> <li>・東海道のミニ尾瀬茸毛湿原㉑</li> </ul>
<p><b>歴史メモ</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・舞坂宿と加宿、助郷③</li> <li>・篠原町仲村遺跡⑩</li> <li>・講について⑪・祇園さん㉑</li> <li>・弥次さん喜多さんと篠原地区⑫</li> <li>・秋葉灯籠⑬・地の神様⑭</li> <li>・里程標⑮・お天王様⑰・高札⑲</li> <li>・舞坂宿の松並木㉑</li> <li>・地震について学んできたこと㉑</li> <li>・松露はつばい村の名物だった㉑</li> <li>・浜ちぎの話㉑・アンバリ㉑</li> <li>・東海道の松1本だけに㉑</li> </ul>	<p><b>昨今の動き(変遷)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・浜松中環状線いよいよ開通④</li> <li>・舞阪駅一新なる⑥</li> <li>・篠原地区の土地改良⑧</li> <li>・篠原も変わる⑩</li> <li>・篠原の地にもあった避病院⑰</li> <li>・メガソーラー続々誕生㉑</li> </ul>	

# 篠原村と山崎村の藻草争論

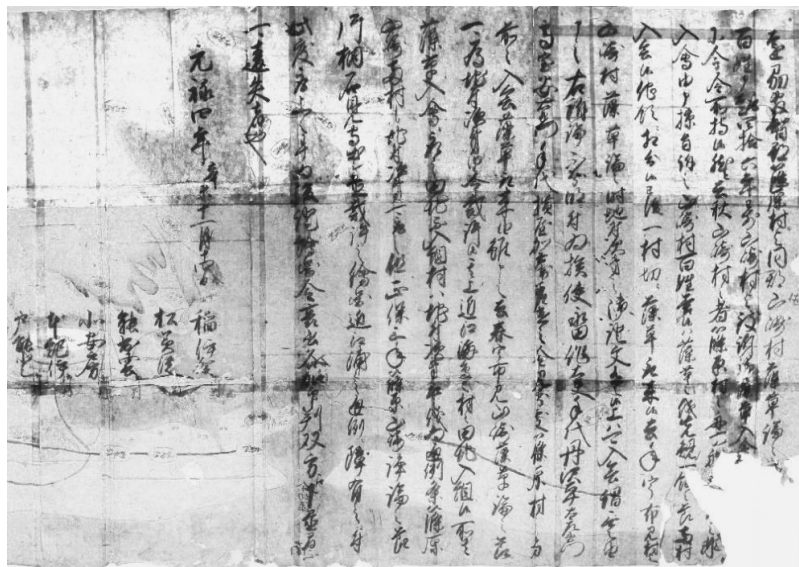
化学肥料のない時代では、藻草の堆肥は重要なものであった。昭和三十年代までは畑の隅に積まれていて、独特は匂いが漂っていた。藻草はモクと呼ばれ、浜名湖に豊富に繁茂し、沿岸の村々は船を出して採藻していた。多くの船が出るので村々の間で藻草争いが後をたたず起こった。

篠原村と山崎村との間で正保年間に争論があり、この時は決着したが四十五年後に再び争論が起こった。篠原村は元禄三年（一六九〇）に奉行所に山崎村を訴えている。鈴木三郎著『浜名湖漁業及漁業権の研究』に訴状の写しがある。その一部を記す。

## 変わる入会地、篠原村が訴える

「四十五年前の争論では篠原村が訴訟を申し出た。片桐石見守が見分して、村櫛村の出崎と山崎村の出崎に筋を引き、入会の境を明確にしこの筋よりの北の入江に篠原村は一切入らないこと、南は入会と命じられた。我々は山崎村地付の川へ一切入らないよう全ての百姓共に固く命じてきた。七月二十四日篠原村塩浜北山崎前の入会場所を藻草取りをしていたところ、山崎村の百姓衆大勢が小舟数十艘にて風上より炭粉をまき、さらに石を投げ、篠原村の百姓は七、八人も手負い、舟六艘を山崎村に取られた。

御役人に出向き何故船まで取られたのか聞いていただいたら、地付の川へ入ってきたと言われたので、地付川とはどこまでかと聞いていた



奉行が下した裁決状

だいたら、山崎村南塩浜の西の庄杭までの全てと言われた。篠原村は以前に決められた入会場所が無くなることになる。古来入会川とし、四十五年前に証文が下された藻草場である。これでは千三百石余の田地は荒れて、御年貢や御役などの勤めはできなくなる。」と詳細に経緯を

述べて、非がないことを訴えている。

## 裁決は「採藻は地付次第」に統一される

篠原町鈴木与一家に保存されていた元禄四年（一六九一）の文書から争いとその裁決を追うことが出来る。題名は「遠州敷知郡篠原村と同郡山崎村藻草論之事」で次の通りである。「篠原村百姓の言い分は、四十六年前山崎村と訴訟があり、藻草は入会で取らせる証文をその後所持していた。しかし昨年秋、山崎村の者が篠原村の舟六艘を取り、入会は存在しないと云い、篠原は藻草を盗み採っていると云うので訴えてた。

山崎村の百姓が答えるには、藻草のことにについては、両村が入会した作領に分け、その後は一村だけで藻草を取ってきた。去年、宇布見村と山崎村の藻草争いの時、地付次第で取る証文がある以上は、入会をすべき理由はないと言っている。右の訴論がはつきりしないので、事実を見届けるために永田作太夫手代丹沢平太左衛門、高屋安右衛門手代横屋加兵衛を派遣して確認した。篠原村の者は前々から入会で藻草取ってきたと言っているけれど、去年の春の宇布見村と山崎村の藻草争いの時には地付次第であるべきと裁許があった。其の上、近江の海辺の村々においては、田地が入り組んでいる所は、藻草は入会にして取り、

田地が入り組んでいない村は地付次第に取ることを通常の規則とした。篠原山崎両村も地付次第に採りなさい。

但し正保三年の篠原山崎争論の時片桐石見守が出した裁許の絵図

は、近江浦々の通常のことには支障があるので、今回これを取上げ（引上げ）た。

後の証のために絵図を裏書して、各印判を加え双方へ命ずるので、遺失してはならない。

元禄四年辛未十一月十四日

（勅定奉行、町奉行、寺社奉行の六人の名前）

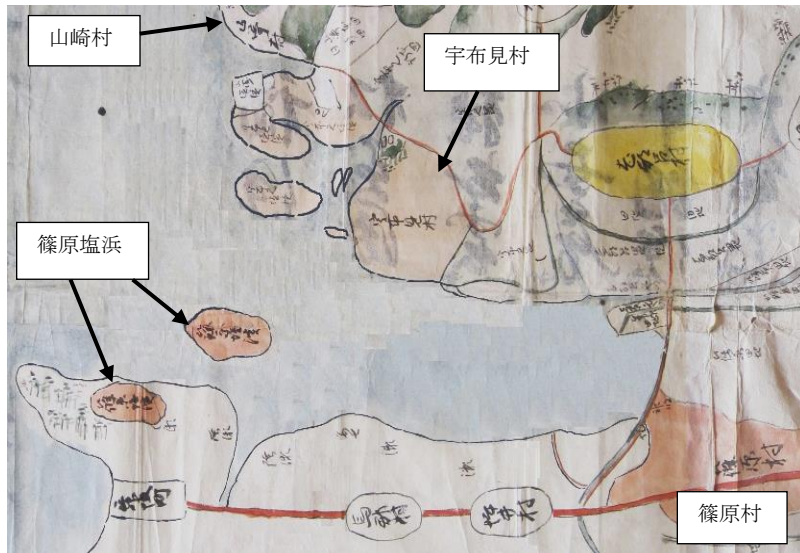
以上であるが、要約すれば、①地付次第で採ること、②海辺村々の田地が入り組んだ所

は入会で採ること、これが原則となった。

一年前の山崎村と宇布見村の争論でも裁許は地付次第に採ることになっているが、四十五年前の正保三年（一六四六）の裁許には地付次

第は求めていないので、原則の考え方が変わったと解釈できる。このことから正保三年の裁許の書類を回収したのであろう。

飛地の塩浜が採藻を守る



裁決状に裏書された絵図の一部

裏に描かれた絵図を見ると、篠原村の海岸は特に短い。にも拘らず多くの採藻船を出し、さらに、権利を主張している理由は、舞坂の北と更に沖合にある二ヶ所の塩浜の存在にあると考え

てよいだろう。もしもこれがなく地付次第の原則を守るとしたら、採藻できる海面は微々たるものになってしまう。江戸の早い時代から塩浜を守り続けてきた理由は、

明心の地震以前ここが篠原の人達の先住地であったらしいことだけではなさそうだ。厳しい時代にそのことで遠方の地を保持することは非常に難しくできるはずがなく、理由は浜名湖内で採藻漁の権利を

守るための重要な土地であったからと考えた

い。篠原村の訴状を見ると、村櫛村百姓の手荒い行為が気になるがモク採りの実態はどうであったろうか。海上では採藻水域は不明確で、また承知で他村の水域に入ることも行われていたのではないか。篠原村の訴状では非は無

いようであるが、大いに疑問である。鈴木三郎氏は著書の中で昭和の時代でも盗藻（盗みモク）が多くあると書いている。こうなると争論のどちらが被害者が断定はできない。

保存された貴重な文書

以上は藻草採りの争論が多くあった江戸時代の一つの例であるが、提供された資料について説明します。

この文書の大きさは縦約九五センチ、横約一四〇センチで表は裁許の書状、裏には浜名湖とその沿岸の村々が描かれ彩色されている。入り組んだ海岸線や篠原・宇布見・山崎村等の塩浜は非常に興味深いものである。

長い間篠原町鈴木与一家で保存されてきたもので、平成四年の浜松市ミニふるさと創生事業での郷土資料室開設の展示物として借用させていただいた。非常に貴重な資料とされ、現在は寄贈され浜松市立中央図書館に収蔵されている。

（鈴木忠）

# 私の環境保全活動

私は篠原東に住む山崎といいます。浜風会へは、篠原中学校PTA関連役が終ったころに、「地域の歴史を勉強しませんか」と誘われ入会した。しかし、日頃の活動への出席はゼロ。年一度のバス旅行へ参加するのが精一杯の状況で、この出稿も辞退する事も考えたが、現状取り組んでいる環境保全活動の内容をPRする事も可能ではないかと思い、したためたものです。次にその一端を紹介いたします。

## 有用微生物EM菌善玉菌に出会って

善玉菌の集まり、EM菌との出会いは、約二十三年前に、名古屋にある(株)能力開発研究所での異業種交流会が発端である。毎月第3週土曜日に開催されていた。その時、所長から『EM菌知っているか』と尋ねられたが、初めて聞く言葉で『知らない』と答えたが、話を聞き、余りにインパクトが強かったので「これはやってみよう」と実践活動がスタートした。現在まで約二十三年間延々と続いている。当日『EMボカシ』資材と容器を2セット購入し、生ゴミの堆肥化を始

めた。その後容量の大きいコンポストへ変更したが、浜松市へ生ゴミは



米とぎ汁を発酵させる作業中



発酵したEM液をプールへ投入



プール清掃時間は大幅に短縮され楽しそう

して、EM資材を活用して、『EMボカシ』の作成を自分で作るべく、愛知県武豊町の竹内善司氏に直接指導を仰ぎ、近郊の希望者に配布している。小中学校のプール清掃に絶大の効果

東京に本部が有るNPO法人地球環境共生ネットワークの環境総合学習として、各小・中学校で毎年4月にプール清掃をするが、プール内の水が

汚れ、底に汚れた『ヘドロ』が有り臭い臭もする。又プールの側面の汚れは、簡単には取れない。しかし、EM資材を活用したEM発酵液を投入すると、1石5鳥なる効能があり、プール清掃時間短縮・水の汚れがない・悪臭がない・水道水使用量が減る・又、この排水が周辺の側溝及び河川、最後は海を浄化する。環境学習の『水を汚さない』学習の目的を、液作りとプール清掃の容易化の体験を実感する。

**EMの普及に今後取組む**

EMは、プールの水質保全のみでなく、トイレ臭の削減にも活用出来る。家庭菜園に、液を薄めて肥料にも使用出来る。私が加入しているNPO法人「日本エルダー協会」は、放置竹林の整備として、竹ホーキを作成し、浜松・豊橋・静岡の動物園及び、各小・中学校へ清掃用竹ホーキを寄贈している。

今後も微力であるが、環境保全活動を地道に進めて行きたい。

(山崎三郎)

浜風会会報第30号  
 篠原協働クラブ同好会「浜風会」  
 (篠原地区郷土の歴史を学ぶ会)  
 編集委員 委員長 山下勝彦  
 鈴木幹久 鈴木忠 藤田博辞  
 発行責任者 山下勝彦  
 発行平成29年1月1日  
 連絡先：浜松市篠原協働クラブ 気付